編物復元－その６－

富山県埋蔵文化財センター

発掘担当者の証言

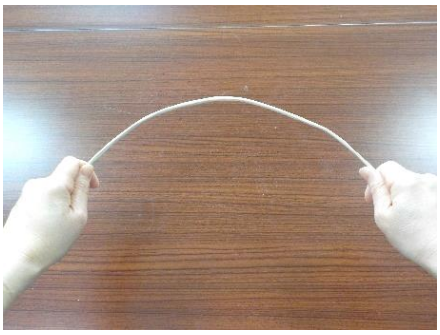
MAIBUN 小竹貝塚プロジェクト Vol.7～11 で、ヒノキの編物復元を行いました。この時に復元した編物は平面的な敷物のような仕上がりになり、発掘担当者の編物出土時の証言「内側が緩やかな曲面をもっていて、現代のザルのような雰囲気だった（Vol.7）」は再現できずに終わってしまいました。今回、改めて、“曲面をもったザルのような編物”の復元に挑戦してみました。

ヒノキの枝を曲げる

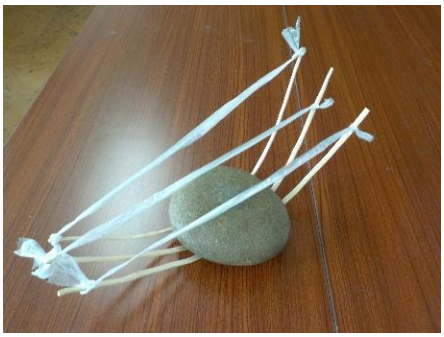
編物の曲面を作るには、編物の芯となるヒノキの枝を曲げなければなりません。しかし枝に一気に強い力を加えると簡単に折れてしまうため、工夫を加えました。

まず前回の復元と同様に、ヒノキの枝は樹皮を剥ぎ、幅 3～4 ㎜に分割して細く加工して縦の条材とします。その後数日間、条材をよく水に浸した後、慎重に曲げて固定しました。この時、水漬けの時間が短いと、枝が曲げている途中で折れてしまうため、必ず数日間水浸させます。また急激に力を加えても折れてしまうため、ゆっくり慎重に曲げました。曲げた条材は、石で重しをしたり丸い鍋に縛りつけたりする方法で固定し、日陰で乾燥させました。なお木を曲げる方法は他に、“竹ひご”工作をするように火であぶったり、“曲げわっぱ”のように熱湯を使ったりする方法があります。

曲げた条材の中から、きれいに曲がったものを 3 本選び、編物の骨材とします。節があるものはきれいに曲がらなかったので、切断して継ぎ足し用の縦材として使うこととします。



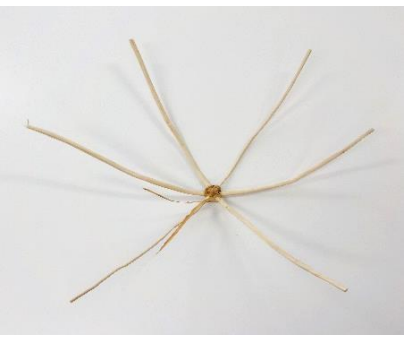
①よく水浸させた条材に力をゆっくりと加え、慎重に曲げます



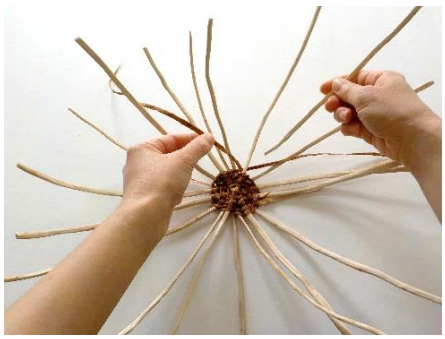
②条材を曲げた状態で固定し、日陰で乾燥させます

③鍋の把手に渡した紐にかけて固定する方法も試しました

④乾燥させた条材。節がある部分はきれいに曲がりませんでした



⑤曲がり方が同じ条材を３本選び、組み合わせて、中心を固定します



⑥前回同様に、縦材を追加しながら樹皮の横材でもじり編みします

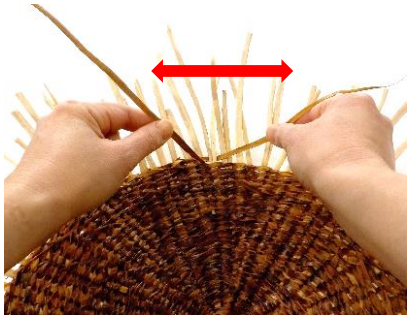
今回の復元で新たにわかったこと

1　丸い形から生まれる張力

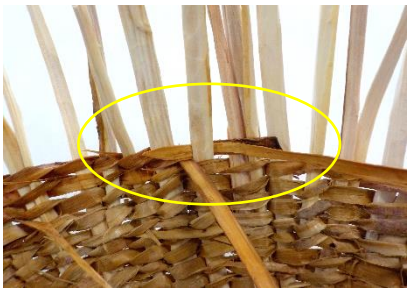
ザルのような丸みのある形に編んでいくと、横材に対して引っ張る力（張力）がかかってきます。この張力は平面的な編物では発生しない力です。張力は縦材と横材が引っ張り合う力ともなるので、張りのある丈夫な編物となります。

また、張力を横材の継ぎ足しにも利用できることがわかりました。横材を継ぎ足す時、新たな横材を縦材との間に挟むように入れると、張力が新たな横材を押さえる力として働くため外れにくくなります。出土品を観察してもわからず、前回の復元でもわからなかった横材の継ぎ方について、ひとつの推論が得られました※。

※　出土した編物では、横材を縦材に差し込むなどといった特殊な継ぎ方をしているものは確認できません。今回推測した継ぎ方のような、もじり編みの流れから逸脱しない自然な継ぎ方をしていると考えられます。



横材を強めに引っ張りながらもじり編みします。横方向に引っ張る力（張力）が発生します

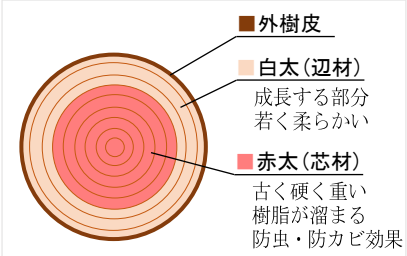


横材の継ぎ方　縦材と横材の間に新たな横材を挟みます

2　継ぎ足す縦材の厚さと部位

丸みのある編物を作る場合、継ぎ足す縦材も柔らかくしなることが重要です。縦材を 1～1.5 ㎜程度にまで薄く削り込むと手でたわめられ、曲げる角度をある程度調整できることがわかりました。

なお木材の樹皮に近い白太（しらた）と呼ばれる部位は、若く柔らかいのが特徴です。堅く裂けやすい赤太よりも白太を選んで縦材に使うと、柔らかく弾力のある編物になります。



木材の断面模式図　復元では主に１～２年の枝を使ったので、これほど年輪はありませんが、赤太が観察できる枝も使って復元しました

3　謎のステッチ

出土した編物（遺物番号 3192）には、横方向のステッチが入っています。使われた条材が同じなので見た目にはわかりにくいですが、螺旋状に連続して行うもじり編みとは全くの別物です。追加で差し込んだ縦の条材を絡めるようにステッチしており、もじり編みよりも後の段階のものと考えられます。編物の完成後、弱く不安定な部位を補強するため入れたのでしょうか。あるいは、ちょっとした装飾として施したのかもしれません。　　（朝田亜紀子）

今回復元した編物（上）とステッチ部分拡大（下）　前回の復元とは異なり、丸みのある形に仕上がりました

小竹貝塚の編物実測図（遺物番号 3192）赤と青は Vol.10 で示した縦材の分岐、黄色がステッチ。分岐部分がステッチされていることがわかります。“アウトラインステッチ”（一目刺し、半目分戻って刺し重ねる線状のステッチ）や“本返し縫い”に似ています

小竹貝塚の編物（部分）（遺物番号 3192）
○の中がステッチです

R5.3.9 公開